

宮日新聞掲載記事(2013年12月22日)とイベント会場の画像及び  
シンポジウムに関するコメント



1部「私も偏見を持っていたかも！」



2部「地域生活は大丈夫！」

日高 信明さん

お疲れ様でした。大成功おめでとうございます。

身体の痛みもあって1部しか参加していませんが、参加できてよかったです。

僕も精神障害者ですが、当事者の話は文字で読むよりもダイレクトに心に伝わり、「生の声」のパワーを感じました。発信することって大事ですね。

発症や入院治療でのエピソードなどを聞くと様々で、誰でも罹りうる病気・障害だとあらためて感じました。

回復のポイントは地域生活の中にある。本当にそう思いました。

甲斐育穂さん

本日はありがとうございました。

障がいやクローズにしても精神的に追い詰められる、オープンにしても頑張りすぎて結局仕事を辞めざるを得ないという当事者の方のお話に共感してしまいました。

うまく自分の病気や障がいと付き合いながら社会貢献をしていく為には、周囲の方々のご支援が必要不可欠であると私も発達障がい当事者の一人として、痛感しております。

そして、周囲の方々に理解をして頂くためには、このような催しを通して、当事者の思いを発信していく、また、支援をしてくださる皆さまの思いも発信して頂いて、お互いに理解をシェアして助け合いながら生きていく、そんな社会を作る必要があると感じました。

田部 篤太郎さん

精神障害と偏見をテーマにいろんな気づきをいただきました。

障害当事者の方々の話からは、病気になったことでの様々な葛藤や、周りの環境、人間関係の中での生きづらさを教わりました。そんな中でも、『自分も病気になって、気づいたんです。気づいたんですが、時々、人間だもの、忘れることもあるんです。それを気づかせてくれること、気づくことが大事だと思います』という言葉が、とても印象強く残りました。自分も、忘れてしまったり、つい、ということがよくあります。他力本願ですが、それを気づかせてくれる人をしっかりつくっていかうと思いました。

2部でも、濃い話が盛りだくさんでした。いつもネットワークとかシステムとか上に上に持ち上げてしまっていますが、それにより、現実の生活の世界から見えなくしてしまってることに反省。

今日の方々は、現状をみて、今、ここでそれぞれの立場、領域で『精神障害』と『地域社会』の橋渡しをされてる皆さんでした！

ありがとうございました！

菊永恵子さん

「へんけん じんけん にんげん」話を聞きにいきました。感じた事は 私(車椅子)はどこから見ても障害があるとわかるけど見ただけではわからない人もいる辛いだろうと思う。どんな障害の人でも寄りそい、その人が自分らしく、さしずされる事なく思い通りに生きる事が出来るといいなあと聞いていた

西畑 良俊さん

学び多き時間でした。ありがとうございました！

一部では、精神障害当事者 6 名のお話を伺い、誰もがなり得ること、別の世界の話ではないこと、そして、顔の見える時間が持てたことで、参加された多くの方にとって身近なものになったのではないかと思います。

個人的には、それぞれ、いろんな思いを抱えながらも一生懸命生きておられるみなさんの姿勢に、エネルギーをいただきました。

二部では、支援者、医療関係者のパネルディスカッションで、改めて、もっともっと、精神障害当事者が地域に出ていける世の中にしていきたいと思いました。

していかないかんですよ。

できることから、やって行きましょう！  
貴重な機会を、ありがとうございました！

生駒新一郎さん

「へんけん・じんけん・にんげん」 県立図書館2階研修室。

本日開催された人権について考えるシンポジウムに午後、どんこやの仲間と出席。  
精神障がい当事者の方の報告に(失礼な表現なようにあるのかもしれないが)、素直に驚きと感動、納得。

自ら持つ力を奪わないでほしい。

家族、医療、地域から受けた言葉、態度。

病気・障がいをOPENにしても、CLOSEにしても力みが制御できずに心身が疲れるところまで行くこともある。

2部の部では、医療・雇用・住まい・権利擁護・地域と関わるの方々のご発言。

ほめてることが、過剰の期待を与える場合もある。

概して、精神障がいの方にこわいイメージ。

精神保健当番弁護士制度が11月から、当事者が困りごとを直で電話できる。

民生員と精神障がいの方、接する機会がきわめてすくない。知らない。

家族も支援が必要。

幼児期から接すると、ごく自然に子どもたちは当事者の方と触れ合っている。

種々の立場からのお話を伺え、正直、知らないことがおおく、憶測で捉え語っていたことを気づかされた。

病気・障がいのことを知ろうとすること思い、どのような環境があり、どう作用をしているのか、学ぶことができた。

目に見えない心は非常にデリケートで、バランスを崩し調律に手をかけることが必要な状態になりやすいもの。

様々な要因から起きる変化を本人も家族も社会も動揺する。

卑屈になったり、隠したり、見下したり。

整ったものスムーズにいくことを常とする基準が余計にそうさせるのか。

見えないこと、解らないことの恐怖が、突き刺さる言葉や行動になる。

見えないは、観ようとしなくていいことか。

解らないは、解ろうとしなくていいことか。

ありのままの人として、向き合う、感じ合う。

子どものように、なりにくい自分、世の中。

そのことを知り、一步を踏み出したい。

たくさん考えさせていただけたい機会であった。

清家 智子

土曜日に参加してきた「へんけん・じんけん・にんげん」。

また長くなってしまふけれど、

聞きっぱなしにしたくないのでノート代わりに失礼します。

全国には323万人の精神疾患者がおり、これは40人に1人の割合。  
うち入院しているのは32万人のみだそう。  
平成25年度宮崎県医療計画によると、  
宮崎県内は4万1千人の精神疾患患者(30人に1人)がいて、  
入院患者が5千人ほど、在宅当事者が3万6千人。

土曜日宮崎県立図書館でも行われたこの会は、  
精神障がい当事者の方々の語りと、  
当事者の方々の自立を支援しようとする関係者の方々のパネルディスカッションの2つで構成されていた。

まず、統合失調症などの当事者の方、  
コーディネーターを含むと6名の方のお話をお聞きして、  
予想以上に色々知る機会となった。

#### ○当事者の声

- ・ 社会の病気に対する理解が浅いため、  
病気についてクローズにして就労し、  
結果的に無理してまた体調を崩してしまった経験。
- ・ デイケアや病院の作業所で同じ病気の人と  
交流できる、仲間ができることの重要性。
- ・ 病院で職員が  
5、6歳の子供のように大人の自分を扱い、  
金銭感覚がないと自立の機会を与えてもらえない経験。
- ・ 家族が自分の障がいについて、  
受け入れ認めることができない互いに苦しい時期。  
その背景にある社会の偏見。

精神保健福祉センターの方が、  
当事者の方の  
「私自身、自分になるまでその病気のことを知らなかった。  
病気になってその場にならないと分からない。  
今でも自分自身忘れることもある。」という言葉に対し、  
「私達が、ついつい(理解することを、相手の立場を)忘れたときに  
気づかせてもらう、言葉にして言ってもらえる  
良い関係ができているといい。」  
とおっしゃられた事が残った。

※ この当事者の方のお話の部も、  
パネルディスカッションに近い形で、臨機応変に答える必要がある。  
会場からの質問へも答えなければならず、大変なプレッシャーがあるはずなのに、  
皆さんきちんと自分の言葉で話しておられた。

次に支援者の方々のお話。これまた普段不勉強なだけに色々知る機会となった。

## ○シンポジウム

### 精神科医の方

- ・ 医療はできることの限界をわきまえないといけない。
- ・ 働くこと、生活することは病院では教えられない。社会でしか学べない。
- ・ 失敗して人は学ぶ。再発を恐れない。
- ・ 食べて、薬を飲んで、寝て、の当たり前の生活を患者さん本人が評価できるといい。それはすごいことなんだ。
- ・ 病気を知ってもらう段階から、「人」を知ってもらう段階へ。
- ・ 知識は武器。
- ・ 患者さんへの関わり方が分からない不安をなくすには、直接その人と会うのが一番。

### 精神障がい者を雇用している民間事業者の方

- ・ 知らないことが最大の武器
- ・ サポート役の人をつける事が就労のうまくいく秘訣
- ・ 世の父親達が数多く会社等で働いている。その職場の(障がい者に対する)企業文化が変わることが社会的偏見を減らすことにつながる。

### 民生委員の方

- ・ 高齢者の見守りはあっても精神障がい者の場合、家族が表に出さないケースが多く支援ができない。
- ・ 民生委員は0歳から時に亡くなった後までもお世話する。

### 弁護士の方

- ・ 患者の退院請求や、処遇改善の請求手続きを弁護士が代理する「精神保健当番弁護士制度」の紹介

そして、

障がい者への住まいの提供だけでなく就労支援をはじめておられる不動産業者の方の「4歳から14歳まで、精神科の病院の社宅で暮らし、患者さんが自分の送り迎えをしたり相談にのってくれたりしていた。」という経験。

その幼い頃からの体験が今の、偏見の無い、障がいのある方の立場になって、自立支援をしようと行動する現在につながっているのだと思うと、偏見の無い、そして「知らない」ということに不安をおぼえない子ども時代に、安全を確保された中で、色々な人と直に日常生活で接する体験は本などで得る専門の知識と両輪で、とても大切なのだな～と改めて思った。